

## 上腕の収縮期血圧の左右差が将来の心臓血管病と関連あり

上腕収縮期血圧の左右差の増大は、診察において容易に見つけられるものであるが、将来の心臓血管病リスクとの関係はよくわかっていない。そこで本研究では、フラミンガム心臓研究の第1および第2世代コホートを対象に上腕収縮期血圧の左右差と心臓血管病の発症や死亡との関係について検討した。

1991~1994年（第1世代）、1995~1998年（第2世代）に登録された心臓血管病の履歴がない40歳以上の患者3,390人（平均年齢61.1歳）を2010年まで追跡した。両腕の収縮期血圧の2回測定値を平均し、10mmHg以上の差がある場合を左右差大とした。上腕収縮期血圧の左右差の平均値は4.6mmHgで、317人（9.4%）が左右差10mmHg以上であった。中央値13.3年の追跡期間中に心臓血管イベントの発症が598人（17.6%）にみられ、そのうち83人（26.2%）が上腕収縮期血圧の左右差10mmHg以上であった。上腕収縮期血圧の左右差大の人は、正常範囲内の人と比べて年齢、糖尿病の罹患率、収縮期血圧、総コレステロール値がいずれも高かった。統計学的解析の結果、上腕収縮期血圧の左右差は心臓血管イベントリスクの上昇と関係し（ハザード比1.38）、左右差が1標準偏差上昇するごとのハザード比は1.07となった。死亡については、このような関連はみられなかった。

以上より、上腕収縮期血圧の左右差と将来の心臓血管イベント発症との間に関連があることが示唆された。

出典：American Journal of Medicine. 2014; 127: 209-215